

人生、時とき雲 のち晴る

【第7回】

古代フラダンサー

水野みさを

グレイトフル・デッド

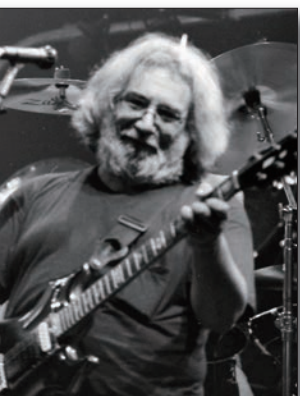
logo design : misao

私が撮ったジェリー・ガルシア↓

ボブ&ナーガの「春風めぐる」で初めて訪れた Flying Books 書店。ふだん渋谷は避けて通るのに Flying Books 書店は、私の第二の故郷サンフランシスコの City Lights 書店 (アレン・ギンズバーグ初詩集『吠える』出版) を彷彿とさせ、その界限も亡き父がよく闊歩していたエリアで妙に懐かしい気持ちになった。

そして Flying Books 書店で懐かしい本と再会してしまった。「自分の生き方をさがしている人のために」。グレイトフル・デッドのジェリー・ガルシアを緑色の革命のチャールズ・ライクがインタビューした本だ。

1980年代半ば、街のノイズと膨大なコマ



*写真：初めて行ったデッドのコンサートで

ズムの渦に、日本には本当の文化など生まれない。建物の全くない地平線を見たい、風を感じて生きたいと日本を出た私。今のようにオルタナティブに生きていく人たちもずっと少なく、モラルや教育や世間の目など縛りがきつかった時代だ。そんな社

(10) No.211 / 2019年5・6月号

会の一駒にされてたまるか精神が、とりあえず何もしないでぶらぶらと生きよう精神を体験させ、自分が何を感じ、何を始めるのかわりたくなった。「出口を見つける時には、今の自分が知っていること全てからぬけ出ていくことが必要なんだ。つまり自分が何かになっていくのと同じように何者でもない存在になっていくということなんだ。そこに一つの決意が生まれる。よし、とにかくとことんやってみようという決意が」

何をしたらいいかわからないでぶらぶらしていた時期、出会った

日本を出て3か月もたった頃、1986暮れ、私は、グレイトフルデッドのグの字も知らないままに導かれた。年の暮れの4日間ニュー・イヤーズ・イヴ・コンサート。場所は、パークレイのヘンリー・J・カイザー。日

本を出る前に中古ニコンをゲットして路上撮影をしていた私は、某誌のカメラマンとして駆り出され会場に向かった。人々から発する柔らかで穏やかなバイブレーション、カラフルなタイダイ、若きヒッピーたち。往年のヒッピーたち、そして親子3代で訪れたヒッピーも。ティーンエージャーの息子に“my sun, growing up!” (息子よ、成長しろよ)と一緒に踊っているタイダイ父子も印象的だった。「フリースマイル、フリーハグ」(笑顔もハグも自由だよ)という言葉があちこちで聞こえ、目が合えば微笑み返してくれる。かなり大きな会場はステージ前のフロアに入りきれなかった人たちが、1階から2階の廊下という廊下まで



デッド・ミュージックに入りこんで踊っている。あ〜、私が求めてたのはコレなんだあと心も融けてしまった。安心して自分を解放できる場所だった。

グレイトフルデッドのコンサート会場には必ずキャンピングできるほどの大きな駐車場があり、そこにデッドランドが自然発生する。デッドの追っかけ、通称デッドヘッズ。全米

どこでも追っかけデッドヘッズは、フォルクスワーゲンのバンやスクールバスの車内を家のように改造して旅を続ける。keep on Truckin'。デッドランドは昼夜問わずギターの弾き語りやドラムサークルが起きていて、ベジバーガー、ベーガンクッキー、手作りのアクセサリやタイダイTシャツなどのマルシェが自然発生する。通常の社会を逸脱し

てユートピアを出現させようとするデッドヘッズたち。60年代、いかにグッドトリップに導くかギター演奏の研究をしたジェリー・ガルシアを中心にグレイトフルデッドが奏でる音楽は、ライブを大切にした独自のスタイルを貫き、貫くことで、共鳴する人々がデッドヘッズとなり、デッドランドが自然発生し、社会現象を生じた。人生で何をしたらよいかわからずぶらぶらする期間、或いは、人生がうまくいかずへこむ時期、デッドの音楽は優しく包容してくれ、インスピレーションをくれた。

デッドランドでは、トレードという言葉をよく耳にした。物々交換だ。パンケーキを焼いた余りを隣にあげれば、お隣さんが庭で採れたハーブで煎れたお茶を交換に。手作りのビーズイヤリングをステキなシルクスクリーンのカードと交換に。デッドのライブ録音したメタルテープをタイダイの大きな布とトレード。など、人々は、貨幣という概念なくしてトレードを楽しんでいる。それは何もモノに限ったことではなかった。

私の横に大きなプラスチック容器を抱えて出現したターザンのような姿のヒッピーが、目の前で蓋を開けた。中にはまだ土のついたクリスタル鉱石がぎっしり。自分が発掘してたきたばかりだという。「この中から好きなものを選んでほしい。このクリスタルをトレードに漢字を教えてください」と。よっしゃー、漢字なら任しとけ。私は、ごくシンプルに、山、川、目、田、鳥など、漢字は元々絵文字なのよと、棒切れで地面に書いて説明し、シャープな透明さを放つクリスタルを一つ頂いた。このクリスタルは今でもパソコンのそばに置いて電磁波を浄化してもらっている。

今年7月の忍野デッド、楽しみだ。今回のエッセイは、今年の春分に虹を渡ったえびはらよしえさんに捧げたい。よしえちゃんと初めて会ったのはパークレイでのデッド・コンサートだった。We are cosmic children.



私たちはいつまでも宇宙で遊ぶ子供たち。

あいとへいわ



↑ライブが始まる前から終わってからもずっと5時間近くこのままでハグしていたカッブル

←廊下で踊っている人たち